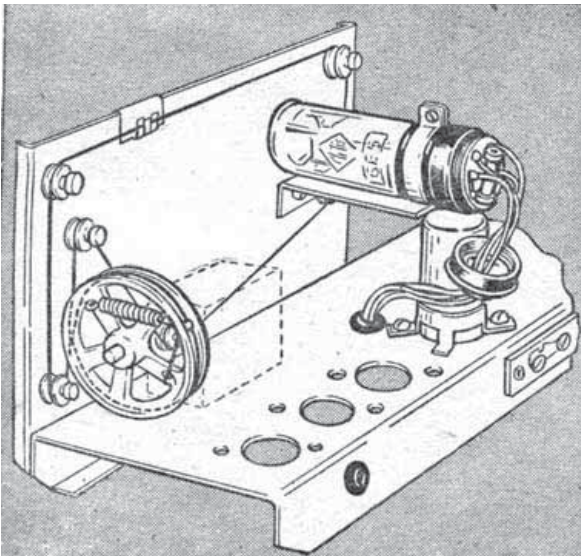
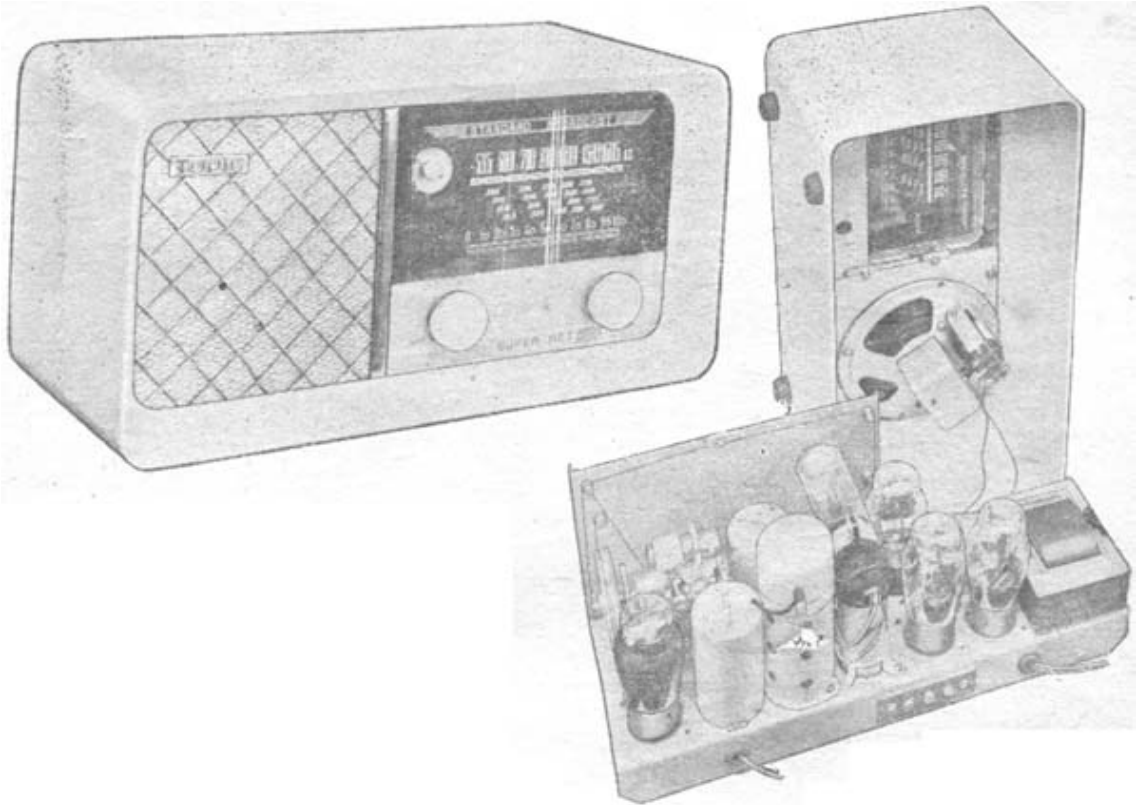
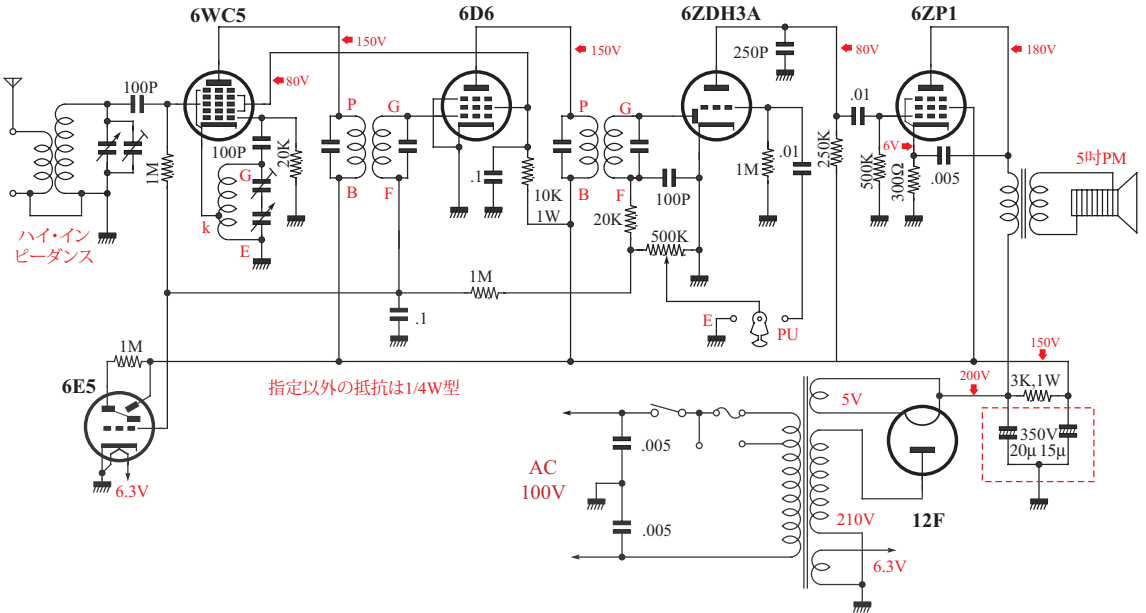


キャビネットをアルミ鋳物にしたマジックアイ付  
 小型6球スーパー トピック TRH 802型



小型ラジオというと、大ていはGT管かミニアチュア管使用のものであるが、ここにご紹介するセットは、写真のようにST管を用いてコンパクトに組み込んだ点が興味深い。従来の小型セットは、とかく地方での売行はかんばしくなかったように聞いている。都会地ではそんなことはあまりないようだが、まだ田舎へ行くと、ラジオというと一つの家具調度品と考えられている。そこでガッチリし

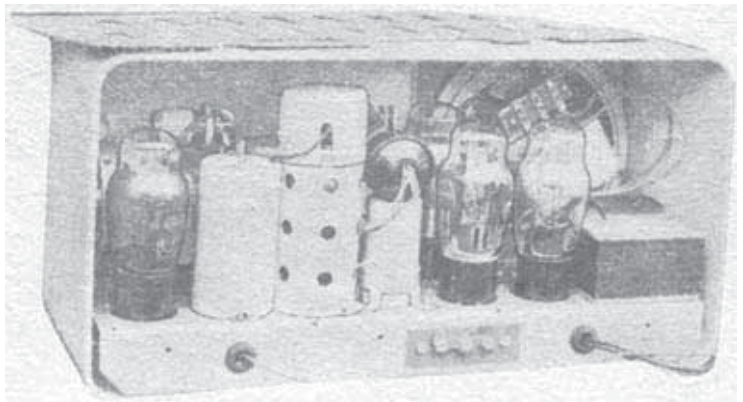
た堂々たるものが喜ばれ、軽快なものは敬遠されがちである。それと同時に球の



小型 6 球スーパーの回路図

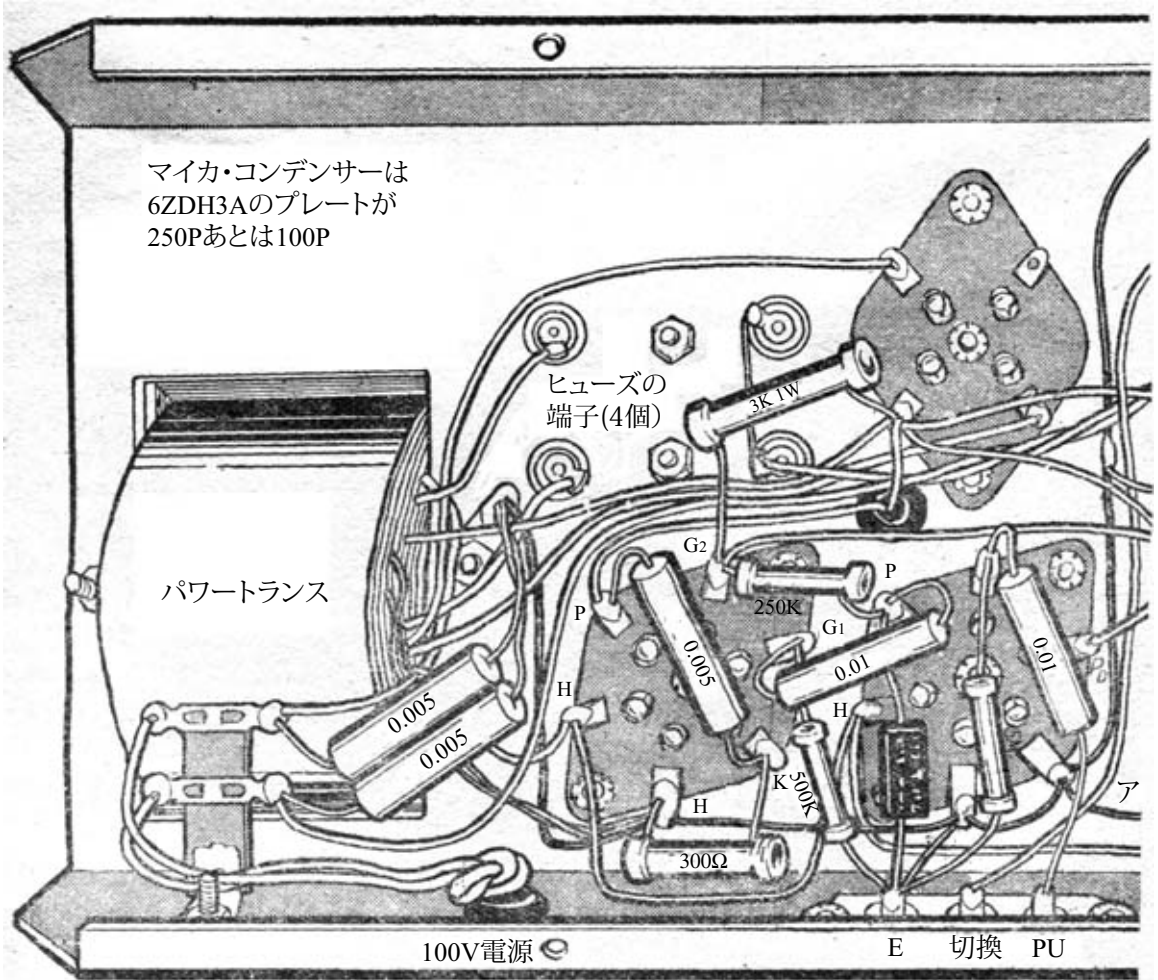
補修ということも小売店では考えられているのであろうか。

これは普通型と小型との中間をいった中型というべきかも知れない。キャビネットの大きさは 325 × 165mm の正面積で、奥行



140mm のアルミ鋳物で出来ている。肉厚は約 3mm である。この中に 310 × 105mm のシャーシーが一杯に入っているが、この「一杯」というのが、この設計のミソである。ST 管を用いてある以上、シャーシーを特に小型に作ることはできない。そこでキャビネットの方を、シャーシーがやっと入るところまで縮めてあると考えるべきであろう。

そのために起きる問題は放熱の点である。ごらんのようにシールド・ケースの頭がキャビネットとすれすれである。このようにスペースのない場合には高周波乾燥の木製キャビネットでも信頼性はうすい。そこで熱の伝導のよいアルミ鋳物にしたわけだが、この点その外観美とともに成功しているようだ。コストは木製の約倍かかるらしいが、<sup>そろばん</sup> 総体的には算盤がとれよう。アルミの地を最近流行のメ

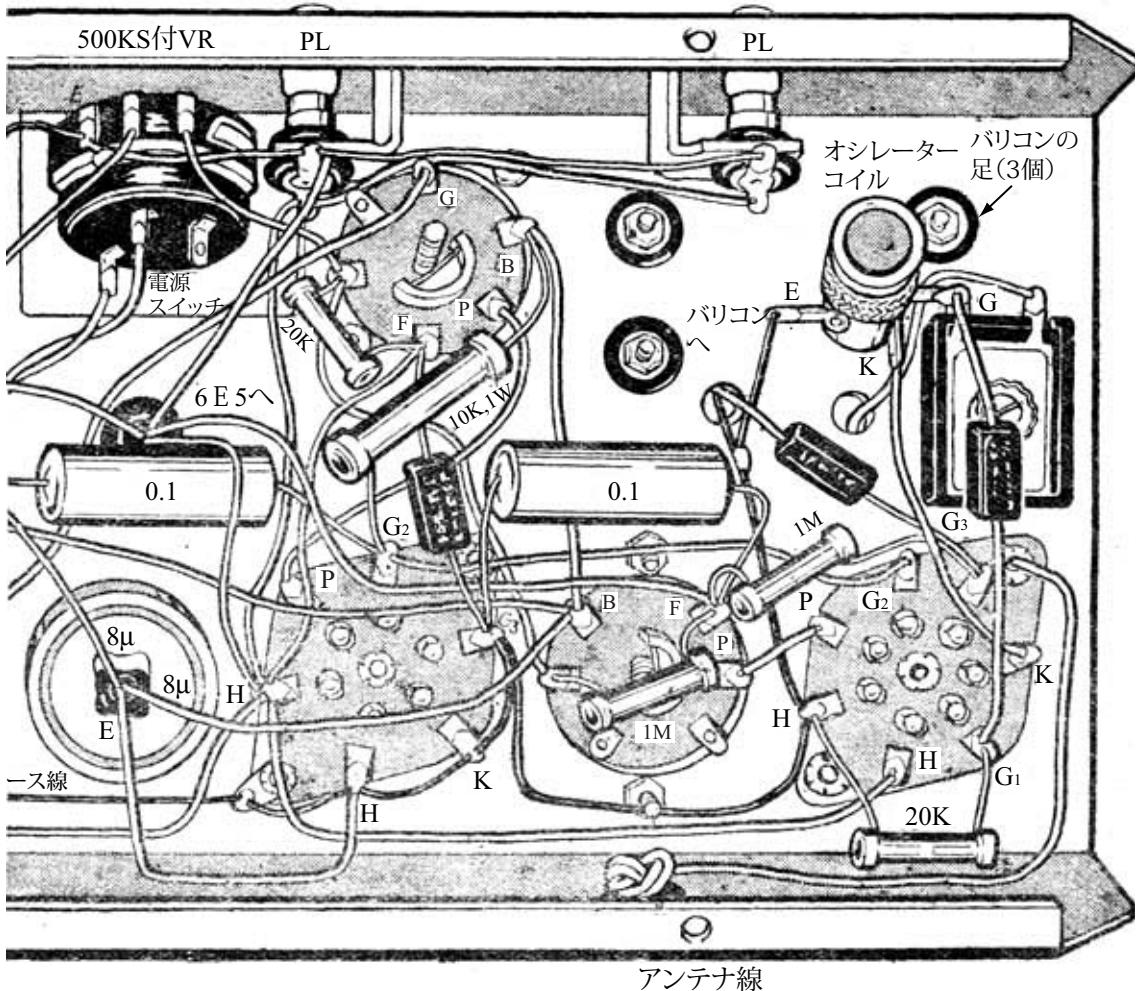


ラニン樹脂でライト・ブルーに塗装してあるのが気持ちよい。

ダイヤル面はややくどいデザインだが、素人目にはかえってよいかも知れぬ。回路は6ZP1の標準5球スーパーであるから、取立てていうこともないが、アンテナ・コイルはハイ・インピーダンス型で、約1mあまりのアンテナ線が附属している。その同調コイルと発振コイルとに、「ミュラー」製のデラックス巻を用いているのが特徴である。

ラジオとフォノの切り替えはシャーシ背面の切り替え金具を左右いずれにかけるかですませている。金具をEにすればPUがつけられ、常時は右にかけてラジオとしてある。

音質云々の点は別として、メーカー・セットから当分は6ZP1が姿を消さぬであろう。それ自身の値段と電源関係が楽になるのがその理由である。6ZP1のカ



ソードにはパスコンを省略して電流<sup>きかん</sup>饋還をかけ、直線性を改良している。

俗にいうトーン・フィルターの $0.005\mu\text{F}$ が6ZP1のカソードに入っているのは、高音カットを高音のみの<sup>ふきかん</sup>負饋還で与えているという点でB+へよりもよいといえるだろう。平滑フィルターには $20\mu + 15\mu$ の大容量を用いて、音質がハムられるのをふせいでいる。

また6E5がついているため、このセットの商品価値が高まっている。そのため部品配置はどうなっているか、これは写真と実体図とから研究していただきたい。(M)

---

## PDF 化にあたって

本PDF は、

『ラジオ技術』1952年11月号所収  
を元に作成したものである。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを  
**ラジオ温故知新**

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/>

に、

ラジオの回路図を

**ラジオ回路図博物館**

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/radio/radio-circuit.html>

に収録してあります。